

第4室 香木・計量器 展示解説

【香木】

インドから東南アジアにかけての熱帯・亜熱帯地域に生える樹木には芳香を放つ樹脂を出すものがあり、これを香木（こうぼく）という。日本には香木は産出しないので、舶来品が用いられた。仏教の礼拝においては香を焚くことが欠かせないので、香木は仏教の伝来とともに伝わったものであろう。そのような事情により、古くから寺院には香木が収蔵されており、法隆寺においても梅檀香（せんだんこう）、白檀香（びやくだんこう）、沈水香（じんすいこう）などが伝えられていた。白檀香には、ササン朝ペルシアのパフラヴィー文字による刻銘やソグド文字の焼印があり、刻銘は貿易に関わった人名、焼印は何らかの単位であろうと考えられている。すなわち東南アジアあたりで産出した香木が、ソグド人やペルシア人によって唐に運ばれ、それがさらに日本に伝わったというような貿易活動が窺えるのである。

N-112 梅檀香（せんだんこう）

N-113 白檀香（びやくだんこう）

N-114 沈水香（じんすいこう）

【計量器】

法隆寺献納宝物に含まれる計量器には、奈良時代の釣桝（つります）と紅牙撥鏝尺（こうげばちるのしゃく）のほかに、室町時代の大桝（おおます）や一升桝（いっしょうます）がある。

N-122 釣桝（つります）

大きな鉄鉢（てっぱつ）形の桝で、口縁近くの4カ所に六花（ろっか）形の鑲座（かんざ）がつけられている。いまその2個を失うが、もとはこれに鎖（くさり）などを通して吊るしたものであろう。口縁近くに記された銘文の「重大廿六斤」は、この桝自体の重さを示し、「受一石四斗」はその容量を示している。随所に見られる破損や補修から、法隆寺内で長年使用されたことがうかがわれる。

N-123 大桝（おおます）

N-124 からN-128 までの一升桝と一具で法隆寺に伝来したものである。杉材を用い、口縁の四方を竹貼りにした、いわゆる竹伏桝（たけぶせます）である。容積は5升2合8勺（9.521 リットル）で、他の一升桝のほぼ5倍にあたり、五升桝の可能性が高い。銘文などはまったくないが、室町時代の製作になると考えられる。

N-124～128 一升桝（いっしょうます）

室町時代に法隆寺で用いられた一升桝5口である。容積は8合2勺（1.472 リットル）から

1升4勺（1.87リットル）までとさまざまであるが、いずれも一升櫛として用いられた。中世には今と違い、各荘園や領主、あるいは寺院内部において、同じ一升櫛でも様々な容量を持つ櫛が使用されていたことが、これらの櫛によっても具体的に示されている。それぞれには康正2年(1456)、長祿3年(1459)、文明6年(1474)などの年記や観音講櫛、地子櫛などの用途を示す刻銘が見られる。

N-83 紅牙撥鏤尺（こうげばちるのしゃく）

天平尺の一尺（約29.7cm）のものさしで、上半分を5区に区画して、ものさしの目盛としている。撥鏤（ばちる）とは、象牙を紅・緑・紺などに染め、その表面を彫り込んで、白い文様を表わす技法のことである。唐時代に行なわれた象牙彫刻の技法の一つで、正倉院宝物と法隆寺献納宝物の中にのみ、古代の遺例が見られる。この撥鏤尺はその貴重な一例で、深紅と象牙色の対比が鮮やかである。

ここでは象牙の表面を紅く染め、宝相華や鴛鴦を線刻している。ただし線彫りは浅く、彫り溝が褐色に着色されるなど、正倉院宝物の作例とは異なるところもみられ、この尺は日本で制作されたものと考えられている。

*次回は、楽器を展示いたします。